

ミュージアム・コンサート

東博でバッハ vol.49 住谷美帆 (サクソフォン)

曲目解説

J.S.バッハ:無伴奏チェロ組曲 第1番

《無伴奏チェロ組曲》(全6曲)が書かれたのは、ケーテン宮廷楽長時代(1717-23)の前期と推定されている。「第1番」は、ト長調という調性が伸びやかな響きを生み出す。第1楽章プレリュードは本組曲中もっとも有名な楽章で、間断なく続く16分音符の流れがその背後で進む和声を浮き彫りにする。第2楽章は安らぎに満ちたアルマンド、第3楽章はイタリア型の急速な3拍子によるクーラント、第4楽章は優雅なサラバンド、第5楽章には2つのメヌエットが置かれている。そして第6楽章の軽快な短いジグで曲を閉じる。

J.S.バッハ:フルートとオブリガート・チェンバロのためのソナタ BWV1030

まずケーテン時代にト短調の曲として書かれ、ライプツィヒ時代にロ短調(最終稿)に改められた。バッハのフルート・ソナタのなかでも人気曲で、演奏機会も多い。第1楽章アンダンテは、特に冒頭主題の旋律が有名。第2楽章ラルゴ・エ・ドルチェは、心に染みわたるような主題旋律がうつくしい。第3楽章プレストは、前半のプレストから後半はアレグロのジグへと続いて全曲を締めくくる。

伊藤康英:無伴奏アルトサクソフォーンのためのシャコンヌ

伊藤康英は、特に吹奏楽曲の領野で世界的に知られる作曲家。曲風は多彩で、本作品は最初期の1980年、作曲家が20歳になる前の夏に書かれたアルト・サクソフォーンのための無伴奏作品。演奏時間は10分ほどである。

J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番よりシャコンヌ

「シャコンヌ」は、《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番》の第5楽章(終楽章)に置かれた大曲で、バッハの無伴奏作品のなかでも屈指の名曲とされ、単独で取り上げられる機会も多い。冒頭で呈示される8小節の主題が、4小節ずつ前後半に分かれて同じ和声進行を繰り返し、その8小節の主題がさらに30回にわたって変奏されていく。

J.S.バッハ:フルートと通奏低音のためのソナタ BWV1035

作曲年には諸説あるが、1741年ないしは47年の作とされる。4楽章構成で、第1楽章は、ゆったりとした旋律に魅力があふれている。第2楽章は、流麗な冒頭モチーフが印象深い。第3楽章「シチリアーノ」は、シチリア風という意味の古い舞曲。ためらいがちに揺らぐようなリズムが特徴的。第4楽章は澁刺とした音楽で、明るく全曲を閉じる。